様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５４２

研究課題名（和文）モリソン『神天聖書』を中心とした漢訳聖書の系譜とその文体論的研究

研究課題名（英文）Study of Chinese Bible

研究代表者
内田　慶市（Uchida, Keiichi）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：６０１１５２９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：今回は「漢訳聖書」のうち、特にポアロの『古新聖経』について研究を深めることができた。そのうち満漢合壁版では、そこに見られる中国語と満州語の対応関係について一つの知見を示すことができた。また、「漢訳聖書」の周辺資料のうち，マテオ・リッチあるいはその周辺者の手によるものと思われる『拝客訓示』についても研究を進め、その語学的特徴や成立過程について一定の成果を得ることができた。なお、『古新聖経』に関しては2018年度中に『古新聖経の研究』（仮題、関西大学出版部）として公刊の予定である。

研究成果の概要（英文）：In this time, I was able to deepen my research on Poiro's the "Chinese Translation Bible". Among them, in the Manchuria and Chinese Edition, we were able to show one finding about the correspondence relationship between Chinese and Manchurian languages found there. Also, we are conducting research on "Baike Xunshi(talented guests)", which seems to be caused by Mateo Ricci or its surroundings, from the surrounding materials of the "Chinese Translation Bible", and have made certain results on the language characteristics and formation process I was able to get it. Regarding "Guxin Shengjing", it is scheduled to be published as "Studies of Guxin SHengjing" (provisional title, publication department of Kansai University) during 2018.

研究分野：文化交渉学・中国語学

キーワード：漢訳聖書　古新聖経　拝客訓示　マテオ・リッチ　モリソン　語学的特徴　満漢合壁　満州語

１．研究開始当初の背景

「彼ら（中国人）の書面語と日常の会話で用いられる言語の違いはきわめて大きく、一冊として口語で書かれた本はない」（マテオリッチ『中国札記』）とか「彼らの書写の方式と会話は全く異なっていて、書写と通常の会話が同じと考えるなら、それは笑い話である」（セメード『大中国誌』）といった早期来華宣教師たちの記述を俟つまでもなく、中国語においては、書面語と口頭語には大きな乖離があったことは周知の事実である。

しかしながら、一方で特に宋代以降の朱子や仏教関係の語録体の文章、あるいは明代の旧白話小説や直解類といわれるジャンルの文章の文体は話し言葉を元にしているとも考えられている。たとえば、直解類について「あのような文体（＝直解の文体＝筆者）すなわち文語・口語の混交体が口頭語としても存在したことにもはや疑いはない」（古屋昭弘「明代知識人の言語生活」1993）というようなことも言われてきた。

こうした、いわゆる中国語の「文体」については、中国人よりもその周縁の人々、特にヨーロッパの宣教師たちは早くから敏感にその違いを嗅ぎ取っていて、また言語学的素養を背景にして、中国語の文体を真正面から取り上げ、その中身について一定程度の科学的な記述を残してきた。たとえば、ド・ギーニュや、それをさらに発展させたロバート・トームを始めとして、メドーズやレミュザ、ハースなどの研究がそれである（詳しくは内田慶市2010「近代欧米人の中国語文体観」を参照）。そして、彼らの残した中国語の資料の中で、量的にも質的にも中国語文体の研究に有効で重要なものは『漢訳聖書』である。

『漢訳聖書』については、しばしば「文理」「浅文理」「官話」、あるいは「文言」「半文半白」「白話」といった三種類の文体に分類されてきたが、三種の文体間の違いは何なのかについては、これまで本格的な研究はほとんどなされてこなかった。文体の問題以外に、『漢訳聖書』の系譜も未だ解明されてはいない。さらには、南京官話訳とされるメドハースト版とその後の北京官話訳との違い、あるいはカトリック宣教師による『聖経直解』とのプロテスタント訳との継承関係など問題は山積している。

近代における中国語の文体には、これら以外にも、宣教師による「問答体」や「章回小説」を模した文体なども存在しており、清末民初にはさらに、梁啓超などの改革派の論説体、あるいはその後の言文一致を目指した五四文学運動における文体、識字教育における文体等々がある。

一方、日本に目を向けると、域外漢語資料として「唐話」資料があるが、そのテキスト間に見られる「雅」と「俗」という対立は、いわゆる欧米資料における文理、浅文理、白話の違いとよく似た側面をもっているように思われ、これについても近代中国語の文体という総合的な観点からの詳細な研究が待たれているところである。

近代における中国語の文体に関するこれまでの研究は、如何なる文体が存在し、またそれらの文体を分ける基準は何か、その場合の鑑定語として如何なるものを設定すべきか等の基本的な事項もほとんど解明されていないのが実情であり、申請者および分担研究者のこれまでの実績を活かしながら本研究を真正面から取り上げようとした所以である。

２．研究の目的

近代の中国や日本においては、「西学東漸」と呼ばれる大潮流の中において、新しい事物や近代的思惟方法の伝来と共に、言語においても多くの新しい現象が生まれた。文体の面でも、かつての書面語と口語の乖離という旧来の文体のみならず、その混交体も起こってくる。特に、ヨーロッパ宣教師たちは、この文体についても非常に敏感で、文言、半文半白、白話といった各種文体を用いたテキスト

を編纂し、聖書の漢訳などを行っていた。しかし、こうした各種文体について、その具体的な姿、それを分ける基準等の体系的な研究はこれまでほとんど行われてはいない。本研究では、近代中国語文体の諸相について漢訳聖書を中心にその本質を明らかにしていきたい。同時に、モリソン訳聖書の系譜についても、そうした文体論の観点から解明していきたいと考えている。

３．研究の方法

本研究は、中国語に如何なる文体が存在するか、それを分ける基準は何かなどを中心に、これまでほとんど行われなかった近代における中国語の文体に関しての研究を『漢訳聖書』を中心に行うものであるが、内田は特にヨーロッパ人の文体に関する専門的著作や論考を取り上げて、そこに見られるヨーロッパ人の中国語の文体観を明らかにする。塩山と朱はモリソンの『漢訳聖書』を中心に、そこに見られる文体の種類と内容を明らかにする。なお、モリソン以外の聖書についても同時に検討する。奥村は、日本における唐話および琉球官話資料に見られる文体についての検討を行い、その言語的特徴を明らかにする。こうした個別研究を、さらに、総合させて最終的に、近代における中国語の文体について体系的な研究成果をまとめていく。なお、これと併せて、近代中国語の実際についても検討を進め、近代における「官話」の諸相や、『漢訳聖書』の成立過程（たとえば内田2010,2012でも示された新しく発見されたバセ訳聖書とモリソンとの関係など）、系譜、言語的特徴等も本研究の中で解明されるはずである。

４．研究成果

本研究に関しては、特に漢訳聖書の新しい発見があったものを中心に研究を進めてきた。このうち、ポアロの『古新聖経』の影印版が台湾から 、活字版が中国から、それぞれ出版され、私たちの研究に大きな手助けとなっているが、これに加えて台湾中央研究院の研究者から北堂版の古新聖経殘巻の提供を受け、研究代表者が以前に発見したサンクト・ペテルブルグ東方文献研究所所蔵の満漢合壁版との対照を行うことが出来た。その成果は『『古新聖経』満漢合壁版・北堂版ー影印與翻字』(游文舎、340ページ)という形で私家版として出版し、関係研究者に配布した。 研究会は東西学術研究所の言語接触班の研究例会に合わせる形で、上述の台湾中央研究院の研究者を招請し、漢訳聖書に関する講演会と、研究代表者と分担者が研究発表を行うなど、3年間活発に行ってきた。なお、研究計画にあった海外調査もこの3年間毎年、ローマ大学、バチカン図書館を中心に行い、新しい資料の発掘を行った。バチカン図書館では幾つかのこれまで未発見の宣教師による官話資料を手にすることができ、今後の研究に役立つはずである。また、この他、本研究課題と密接に関連している漢訳聖書以外の域外漢語資料を利用した研究も着実に進行することができた。たとえば 、カサナテンセ図書館蔵の宣教師による雍正帝の弾圧事件の供述書に関する研究代表者やバチカン図書館等に収められているマテオ・リッチの手になると思われる「拝客問答」に関する研究も深化させることができた。この「拝客問答」の研究では、カトリックとモリソンを始めとするプロテスタントが実は資料面では極めて密接な関係になったことも私たちのグループによって指摘され新しい知見を発信することができた。なお、本研究は「文化交渉学」を基盤としており、「文化交渉学」に関してもその社会的認知度の向上と、方法論の優位性について多 くの機会をとらえて発表を行ってきている。研究分担者も研究例会や国際会議では同じパネルで発表を行ってきており、多くの成果をあげてきた。このように、本研究の所期の目的はほぼ達成されたものを考えており、これらの

研究は学界に大きく裨益するものと確信している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 『耶蘇教官話問答』にみる19世紀中葉の官話の一端―『古新聖経問答』との比較を通して―、塩山正純、査読有、愛知大学語学教育研究室『言語と文化』38号、pp.63-79、2018

② 有關《拜客問答》的若干問題及其他、内田慶市、査読有、『東アジア文化交渉研究』、pp.87-100、2017

③ 清代雍正期檔案資料の供述書-雍正4年（1726）允禩允禟案件における「供」の言葉、奥村佳代子、査読無、『周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイヴスの構築』(内田慶市編著、遊文舎）、pp.57-83、2017

④ 漢訳聖書における音訳語の継承と創造、朱鳳、査読無、『東アジア言語接触の研究』（内田慶市・沈国威編、関西大学出版部）、pp.259-274 、2016

⑤ 漢譯聖經研究的新的局面-以『古新聖經』為主-、内田慶市、査読無、『關西大學中國文學會紀要』，第37号,pp.1-13, 2016

⑥ Ka薩納特圖書館藏雍正朝教案、内田慶市、査読有、『東西学術研究所紀要』, 49号、pp.7-20、2016

⑦ 関西大学アジア文化研究センター『鱒澤文庫』の珍蔵本、内田慶市、査読有、『東アジア文化交渉学研究』、9号、pp. 3-15、2016

〔学会発表〕（計　14　件）

招待講演・基調講演

① 周邊看中心-漢語研究的一個方法、内田慶市、第9回東アジア文化交渉学会、2017

② The translation of culture.-Aesop in the East from the point of view of cultural interactions、内田慶市、ISCAL、2017

③ 漢語研究的周辺方法論、内田慶市、第9回世界漢語教育史研究学会、2017

④ 文化交渉学と言語接触研究、内田慶市、『東アジア文明――継承と創造』国際シンポジウム(浙江大学)、 2017

⑤ 有關《拜客問答》的若干問題及其他、内田慶市、世界漢語教育史国際シンポジウム、中山大学(中国) 、2016

⑥ 域外漢語研究的有効性、内田慶市、第七回世界漢語教育史国際シンポジウム、2015

国際会議

① 西洋傳教士的虛實論和波爾羅瓦雅爾語法、内田慶市、第1回欧州漢語教学学会、2017

② 關於江沙維的漢語研究ー以『漢字文法』的北京話為主ー、内田慶市、第5回澳門学国際、2017

③ 何禮之在明治維新期西書翻譯中、内田慶市、第2回中国翻訳史国際シンポジウム、2017

④ 西洋伝教士的虚実論和Porl Loyal語法、内田慶市、欧州漢語教学会議、2017

⑤ 關於中文版Doctrina Christiana（1593）的語言、奥村佳代子、東アジア文化交渉学会第9回国際シンポジウム、2017

⑥ Louis Poirot's Manchu-Chinese Translated Bible、内田慶市、21th Biennial Conference of the European Association for Chinese Studies、2016

⑦ モリソン著作中の「拝客問答」、朱鳳、漢語教材史国際学術検討会―世界漢語教育史研究学会第八届年会、2016

⑧ 東亞文獻資料的電子化的現状和未來、内田慶市、東亞文學觀念史與數位人文 Digital Humanities and East Asia

Literature Research、2015

〔図書〕（計　7　件）

① 『北京官話全編の研究 付影印・語彙索引 下巻』、内田慶市編、関西大学出版部、pp.954、2018

② 『北京官話全編の研究 付影印・語彙索引 上巻』、内田慶市編、関西大学出版部、pp.740、2017

③ 『北京官話全編の研究 付影印・語彙索引 中巻』、内田慶市編、関西大学出版部、pp.760、2017

④ A Study of Cultural Interaction and Linguistic Contact Approaching Chinese Linguistics from the Periphery, Keiichi Uchida, V&R Unipress,pp.281,2017

⑤ 『官話指南の書誌学的研究』、内田慶市・氷野善寛共編、好文出版、pp.725、2016

⑥ 『東アジア言語接触の研究』。内田慶市・沈国威共編、関西大学出版部、pp.440、2016

⑦ 『古新聖経』満漢合璧版・北堂版-影印與翻字(私家版)、内田慶市編、游文舎、pp.340、2016

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

内田慶市（Uchida,Keiichi）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：60115293

(2)研究分担者

朱　鳳（Zhu, Feng）
京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・教授
研究者番号： 00388068

塩山　正純（Shioyama, Masazumi）
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号： 10329592

奥村　佳代子（OKumura, Kayoko）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号： 10368194

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

（　　）